

佐藤春夫「魔鳥」と台湾原住民—再周辺化されるものたち

SATO Haruo's "Macho" and Taiwan Aborigines :
Their Sufferings from Re-colonization

磯村 美保子

Mihoko ISOMURA

1. 「呉鳳伝説」から

— 台湾原住民¹⁾・「魔鳥使い」・女性

戦前戦後の台湾において、そしてまた日本においても公教育の教科書に掲載され続けた台湾原住民をめぐる物語がある²⁾。

台湾の蕃人には、お祭りに人の首を取って供える風がありますが、垂里山の蕃人だけは此の悪い風が早くから止みました。これは呉鳳という人のおかげだと申します。

『尋常小学校国語読本』 大正6年
(1917年)³⁾

「呉鳳伝説」は、清朝の役人であった呉鳳が、その地のツォウ族の首狩の習慣をやめさせるために自らを犠牲にしたという伝説である。1987年には「原住民に対して重大な損害を与える」として台湾の公教科書から削除されている。しかし、この呉鳳を祭る呉鳳廟(台湾嘉義市)は現在でも観光名所の一つとなっている。また「義人呉鳳」(1932年台湾プロダクション)や、現在では失われてしまったが「阿里山の侠児」(1927年日活)という台湾の山地を舞台にした映画にもモチーフとして取り入れられている⁴⁾。

この物語が植民地下の台湾で、さらに国民

党政権下においても広く教科書というメディアを通して流布されたのはなぜだろうか。

「呉鳳伝説」は、植民地下においては「理蕃5ヵ年計画」⁵⁾(1910年~1914年)、つまり原住民征服戦争に中国系台湾人を巻き込むためのイデオロギーとして、戦後においては、台湾人と原住民の内部植民体制を形作るものとして作用した。そこには台湾原住民を「野蠻」とし、中国系台湾人を「文明」とする論理があった。植民の使命を「遅れた地域の文明化」とした日本帝国と台湾との関係の中に、さらに、中国系台湾人と原住民の関係が内包されていたのである。

山地開発を目論む植民統治者にとっては「蕃害」はきわめて厄介なものであった。「首狩」はまさしく自らに降りかかってくることであり、「野蠻」の象徴であった。「蕃人・生蕃・熟蕃・高砂族」と、台湾総督府は台湾原住民を自らの都合によって名付け変えてきた。

名付けという行為は取り込みという人間の儀式の一部をなしており、名付けられないものは、非人間的なものや人間以下のものよりもさらに人間から隔たっている。だから、脅威を与える他者性はどうしても手持ちの目録のなかにあるイメー

ジに変換されなければならない。…現在「発展」と呼ばれている概念は、古代後期以降、六つの形式変換を経てきたようだ。外部の者を援助が必要な者と考える思想は、古くは其の外部者を野蛮人と呼び、次には異端者と呼び、次には異教徒、野人、「ネイティブ」、そして低開発国民と呼んできた。いうまでもなく、意味が際限なく分解し続けるこれらの呼称は、それぞれの対立者との関係の中でのみ存在する。「野蛮人は、まず第一に蛮行を信ずる者のこと」だとされている。

トリン・T・ミンハ

『女性・ネイティブ・他者』P86

「首狩」という習慣が植民者にとって「野蛮」とされ説明不可能なものであったのと同じように、「理蕃5ヵ年計画」で強行されたジェノサイドは、原住民にとって「説明不可能」な事態であったのである。どちらが野蛮人か、蛮行を信ずる者か。

本稿では、台湾原住民の伝説に取材した佐藤春夫の「魔鳥」を取り上げ、植民地下の台湾原住民がいかに周辺化されたか、さらに原住民の中で日本兵に犯され、「魔鳥使い」とされた原住民女性が再周辺化される過程を追う。植民者・被植民者という関係だけでは語れない多重性をそこに見ることができるだろう。一方で「魔鳥」が関東大震災の直後に書かれたという時代背景にも触れておかなければならない。「魔鳥」とされたものは当時の日本の中にも存在したのである。

また、佐藤の「魔鳥」は森丑之助『台湾蕃族誌』を参照して書かれた。この両者の植民地台湾に同情的であったとされる日本人知識人の台湾に注がれる視線がどのようなものであったのか、合わせて考えてみたい。

「魔鳥」という記号は何を表わすのか。

2. ポストコロニアルと文学

さて、稿を進める前提として、台湾というかつての日本の植民地の問題を、文学作品を通して考察するという行為には、どのような意味があるのか、考えておきたい。本橋哲也は、ポストコロニアリズムはコロニアリズムの終わることのなき再検証である、と述べ、「歴史・文学・証言」の三つの対象領域があると指摘している。

「正典」と呼ばれた支配的な文学作品を植民地主義との関係で再考すること。…(中略)さらにその作品が植民地支配の進展とともにさまざまに改作され、新しく解釈されてきた歴史をたどり、現在における脱植民地化の課題に取り組むうえでの重要な資源のひとつとして活用する。文学テキストこそは、自己と他者がどのような力関係において相互的に作られるのかを考える格好の題材なのだ。

本橋哲也『ポストコロニアリズム』
P13~14

さらに作家と作品、そして現実の間の距離について、レイ・チョウは、「芸術は歴史からその材料をとっているという単純な理由でイデオロギー的である」と述べ、以下のように指摘する。

イデオロギーと同じように文学作品は完全であると同時に不完全でもある。つまり、文学作品はすでにできあがっている歴史の産物であり、その限られた中で、批評の介入によらなければ「完全」にはなりえないのだ。

レイ・チョウ

『中国と女性のモダニティ』

P109~110

一個のイデオロギーである文学作品の「読み」という行為には受容という側面があり、それはあらたな生産行為である。この「読み」

という行為を通じ、「われわれはいかに植民地主義的な存在となったか、また、今そうであるか」を問うことができる。

では、日本統治下であった1920年代の台湾を舞台に書かれた「魔鳥」には、どのように批評的に介入すべきなのであろうか。以下、考察を進めていきたい。

3. 佐藤春夫「魔鳥」について

3-1 佐藤春夫の台湾旅行

佐藤春夫（1892年～1964年）は、1920年に台湾を旅行した。台湾で歯科を開業しようとする和歌山の旧友東熙市の誘い、谷崎婦人との恋愛問題の鬱屈をきっかけにしたという。6月末から10月のはじめにかけて4ヶ月あまりの旅行であった。当時、新進の作家として注目されていた佐藤は台湾各地で歓迎された。小説集『霧社』（1936年）に収められた「かの一夏の記」によれば、基隆港に到着後、台北で台湾博物館勤務の森丑之助⁶⁾に会い、旅行の相談をしている。その後すぐに東の居のある高雄に向かう。この地を基点に台南以南を巡り、対岸の廈門・漳州まで足を延ばした。旅程に関しては森の「見るべきところをつくしてやろう」という教えに従い、通常の旅行者が不便のあまり省いてしまうような鹿港や山岳地帯もルートに入れている。

佐藤は、高雄滞在を終え、嘉義、日月潭、霧社、鹿港、台中などを半月あまりで回り、台北に再び森を訪れ、もてなしを受けている。高雄から台北に向かう途中、霧社付近のサラマオ社の原住民の蜂起が起り、それを目撃することとなった。この事件を題材に小説「霧社」を書く。小説集『霧社』に収められている作品の舞台については以下の通りである。

「日章旗の下に」 恒春

「女誠扇綺譚」 安平
「旅びと」 日月潭
「霧社」 埔里社、霧社、能高山
「殖民地の旅」 台中、鹿港、胡盧屯、阿单霧

佐藤の台湾上陸は大正9年（1920年）7月5日、離台は10月15日とされている。後年、佐藤はこの台湾旅行を振り返り、「最も成功した旅」としている。

台湾の風物に関しては私は多くの作品を書いた。ここに改めて書くのもかへって煩わしいばかりである。それにしてもあの華麗島をもはや日本の風景として細叙することができなくなったのは私にとって遺憾千万な気がする。

「日本の風景」1958年⁷⁾

佐藤は台湾を日本の一部として認識していた。彼の植民地関連の著作、たとえば「霧社」には台湾に同情的あるいは共感的な叙述も多数見られる。しかし、上記に見られる彼の台湾に対する感覚は「同じ日本人として」というものである。彼は日本の植民地統治の手法には批判的であったが、植民地とすることに反対していなかったと思われる。この感覚は後述する森も共有している。

3-2 佐藤春夫「魔鳥」

佐藤春夫の「魔鳥」は大正12年（1923年）10月に書かれ、『中央公論』（1923年10月号）に掲載された。台湾旅行から3年を経て、関東大震災の直後に書かれている。

震災直後に発表した「魔鳥」という蕃人伝説に取材した作品は、その原稿を受け取った記者が、この場合これは一種の流言小説とも名^マずくものでしょうねと評したのをそういえばそんなものかなあと思ったのを覚えている。

「詩文半世紀」1963年⁸⁾

「魔鳥」は、佐藤が台湾に取材し書いた小説ではあるが、一方で関東大震災の直後に書かれたということも重要な点である。流言小説と「魔鳥」とはどのように関係するのだろうか。

以下、「魔鳥」をめぐる、関東大震災、森丑之助、原住民女性などの観点から、「魔鳥」という記号が何を指すのか、分析をすすめていきたい。

3-3 「魔鳥」の物語

この作品は、語り手である「私」が、台湾と思われるある国の植民地を旅し、そこで聞いたことを記すという展開となっている。日本や台湾などの固有名詞は一切でてこない。以下、原文を抜粋しながら物語を追ってみよう。「魔鳥」は佐藤自身と思われる語り手が聞き手である「君」に語りかける形式をとっているが、聞き手の存在は希薄で、最後には独白となってしまう。物語の後半からは創作的な色彩が濃くなる。

緒言 私が今述べようとするのは或る野蛮人の迷信に関するものである。一たい野蛮人にだって迷信はある。その点は文明人と同じである。

一 私が君に説明しなければならないのはこの野蛮人の中に一種不可思議な鳥がいるということである。彼らはその魔鳥をハフネと読んでいます。…一度この鳥を見ると必ず死ななければならない。死なないのはハフネ使い、つまり魔鳥使いだけである。

二～四 野蛮人だって生命は大事なものにする。…従って魔鳥使いが発見されるような場合には仲間の人々はその魔鳥使いを一刻も早く殺してしまうのは無論、その家族も一人残さず殺戮する。それにしても魔鳥使いというのはどう

いう風に発見されるのか。

五 要するに、仲間の者が魔鳥使いに仕上げてしまうのだ。皆でそう認めてしまうのだ。

六 彼らは自分たちと違った表情のものを魔鳥使いにしてしまう。しかし、文明人の中にも「魔鳥使い」と認められた人々はたくさんいる。

七 (蕃地⁹⁾を旅する私は、道案内の蕃人から、最近魔鳥使いの一族が滅ぼされた話を聞く)

八 一たい事の起りはピラにあるのだ。ピラは十八にもなったのに刺墨しなかった。…

(ピラの家族を取り巻く「分からないこと」、そして部落に降りかかる想像もできない災難—或る文明国の軍隊が突然やってきて非道な行為を繰り返す)蕃人たちはこれはきっと魔鳥使いの呪術があるに相違ないと考えている。…それなのに、その軍隊のあとをついて歩いているピラを見かけたという噂だった。(ピラがその狂暴な軍隊の後をついていく理由はだれもわからなかった。ピラがその兵に犯されたという噂。だから彼女は刺墨をしないのだ)…大部分の人たちはその娘たちを魔鳥使いと決めてしまった。

九～十四 (村人たちはピラの小屋に火をつけた。ピラと最も小さい弟コーレだけが助かった。ピラは村人に告白した。噂は本当だったのだ。命は助けられたが不浄を理由に村から追放され、山の中でコーレを育てた。しかし、ある日、ピラは蛇にかまれて死んでしまう。泣くコーレ。降り続いていた驟雨が止むと虹が彼らの小屋から大きくかかっていることに気がつく。蛮人は虹をわたっ

てポケーン天国に行くと思じる。コーレは虹を追いかけて見知らぬところへ迷いこむ)

十五 一隊の蕃人たちが赤い飾りのあるラッタンを着て、狩の支度で林の中に潜んでいた…それが自分たちの蕃社のものでないことを認めると、彼らの一人は狙いを定めた。

十六 …きっと裸で、そうして首のない小さな屍がひっそりとしたところへ残されていたであろう。そうしてその上であの大きな虹がおもむろに薄れていったであろう。…私は蛮人の社会にもあるところのさまざまな迷信に就てまた文明人の迷信について、何かと考えてみたのであった。

3-4 関東大震災と流言小説「魔鳥」

佐藤は前述のように「魔鳥」を、一種の流言小説といわれればそうかもしれない、という言葉を残している。

（文明国が植民地において自分たちと風俗の異なる人間たちを牛馬のように扱うのに加え）或る文明国の政府が、当時の一般国民の常識とややその趣を異にした思想を抱いていた人々を捕らえて、（中略）それを危険なる思想と認めて、しばしばその種の思想家を牢屋にいれ、時にはどんどん死刑にしたのを見聞したこともある…文明人の中にもまた、「魔鳥使い」と認められた人々は多数いる。

「魔鳥 (六)」

関東大震災は1923年9月1日に発生し、東京は焦土と化した。1日夕方には早くも朝鮮人襲来の流言が起り関東一円に広がった。関東大震災の流言に纏わる事件としては、この朝鮮人・中国人虐殺、アナーキスト大杉栄の殺害などが起こった。大杉事件は9月16日

に発生、19日には首謀者とされる甘粕正彦が逮捕され、衆目を集めるところとなる。「魔鳥」が掲載された『中央公論』10月号の目次を参照するとほとんどが震災関係の記事となっている。

「魔鳥」の上記引用部分からは1910年の大逆事件、1919年の朝鮮における3・1独立運動、さらに震災時の朝鮮人虐殺事件、大杉事件などが連想される。大逆事件では佐藤と同郷であり父の友人でもあった大石誠之助¹⁰が処刑され、佐藤は事件翌年の1911年、19歳の時に「愚者の死」という詩を発表している。この「大逆事件紀州組」の逮捕・処刑は、知己を得ていた人々が犠牲になったこともあり、当時青年であった佐藤に大きな衝撃を与えた。

さらに大杉栄とは「隣人」として10数年に渡る交友関係があった。佐藤は大杉が殺害された直後に「吾が回想する大杉栄」という小文を『中央公論』11月号に書く。「魔鳥」を10月号に「吾が回想する大杉栄」11月号に発表したことから、この二作品の関連が考えられる。発表当時にはなかったが、後に発表された全集には、稿末に日付が記されている。佐藤の他の作品には必ずしも日付が記されていないことを考えるとこの二作品には連作の意識があったのではないかと推察される。

しかし「魔鳥」自体が大杉事件を知ったあとに書かれたものかどうかは確定できない。当時の『中央公論』は毎月20日前後に印刷納本されているが、1923年の10月、11月号に限り印刷納本が30日、1日発行となっている。今回は当時の印刷状況を知ることはできなかったが、このことから出版に関して震災の影響があったのではないかと推測できる。しかし佐藤は震災直後、親族の無事を確かめた後、10日前後には新宮に引き上げている。当時の新宮・東京間の交通事情は海路10時間、鉄路10数時間という不便なものであった。大杉事

件関連の記事が『中央公論』に掲載されるのは11月号からであることを考慮すると「魔鳥」と大杉事件の直接の関係を証明することは難しい。今回、中央公論社に震災当時の出版状況と「魔鳥」執筆経緯について問い合わせしてみたが、資料は残されていない。

佐藤の「吾が回想する大杉栄」には、大杉との交流がエピソードを交えて記述されている。

（原敬の暗殺を知った時の大杉と佐藤との会話）「やったのは子供のだね」…大杉がその時言ったことはそれだけである。ここで注意しておきたいのは、大杉がこの出来事に就て「痛快だ」とか「面白い」だとか、そんな浅薄な不謹慎な言葉はもとより、その外のどんな批評めいたことばも言わなかった事実である。

「吾が回想する大杉栄」¹¹⁾

震災に乗じて暴動を扇動した、という流言から程遠い大杉の姿がそこにある。彼の死もまた、佐藤の「魔鳥」のイメージと重なる。

4. 森丑之助『台湾蕃族誌』と「魔鳥」

佐藤は「霧社」という作品の中で、森丑之助の『台湾蕃族誌』を携帯して台湾を旅行したと窺える記述をしている¹²⁾。また同作中のM氏は森のことを指す。「魔鳥」についても『台湾蕃族誌』を参考にして書いたと思われる。佐藤春夫と台湾の関係を考えるとき、森丑之助の存在抜きでは語れない。佐藤は森の眼を通して台湾を見聞したかのようである。

4-1 森丑之助について

佐藤春夫は森について以下のように述べている。

丙午といえば私より二まわり上の丑年でもあろうか。それくらい年齢のもの柔らかに静かな紳士であったが、後に聞け

ば、日清戦争に、人の乏しかった南京官話の通訳として従軍し、戦後領台と同時にこの島に渡り、蕃人の研究を志し、言葉に京なまりがあり、片足は不自由らしく跛行していたが、見かけによらない豪傑で、身に寸鉄も帯びないで、蕃山を横行して、蕃人からは日本の酋長であろうと噂されている人であった。その身は閑職にあったが、総督府内の古顔でもあったから上司に私のために便宜をはかってくれるように頼んでくれるし、自分では島内の見るべき場所とその道順とをスケジュールに作ってくれた。

「詩文半世紀」（前出）

森は、1877年、京都市五条の商家に生まれた。その当時の京都は現在と違い、幕末から明治維新を経て、都が東京に移ったこともあり相当に寂れていたという。16歳で長崎商業学校において南京官話を学び、18歳（1895年）の時に通訳として台湾に渡った。そこで台湾原住民と出会い、その後、30年に及ぶ調査研究の日々を送ることとなる。山地を巡る調査では幾たびか危険な目にもあう。学歴がなかったためか、その身は閑職にあったが、生前発表した『台湾蕃族誌』大正6年（1917年）は大きな反響を呼んだ。しかし、彼の研究成果である様々な資料も関東大震災の際、ほとんどが消失してしまう。

森は台湾原住民の多くの部族と直接交渉を持ち、言葉もよくしたという。武力をもって封じる台湾総督府の「理蕃5カ年計画」に批判的であった。晩年には、最後まで抵抗したブヌ族シブクン蕃の状況を憂え、平和的解決のために集団移住計画、つまり、「蕃人楽園」計画の実現のため奔走した。しかし、この夢のような計画は挫折、鬱にとりつかれた森は大正15年（1926年）に笠戸丸から投身自殺している。

最後に森氏は先々月九日（？）より、先月三四日まで私方に滞在、九日帰宅せられしに先月一七日、宅より、今月3日より行方しれず心当りなきやとの電文あり。…その後噂にて、同月四日の夜明け、台湾より門司への航行船より海中に投じたる人、同氏らしいとの事を聞き心痛いたし居り候ところ、本月一日（？）ウシノスケリョコオチウシキヨスと令嬢より電文あり。…深き事情は一切不明、…同氏は全く東洋豪傑風の一面の外に、女色を愛し、感傷の癖あり候やに聞き及び候或はそのあたりに事情ありしか。

佐藤春夫大正15年（1926年）書簡¹³

佐藤は父への手紙の中で森の死について触れている。家族とも日常的に話題になるほど佐藤にとって近い人物であった。森の突然の死は、女性問題か、また、メランコリーの発作か、死の直前まで交友のあった佐藤にとってもあまりにも唐突な出来事であった。

森の「蕃人楽園」計画は衆人の批判を浴びた。研究資金として与えられた金をこの計画に充てようとしたことなどの森の行動をよく思わない周辺からの誹謗もあったという¹⁴。彼もまた周囲からはなぜそのように「蕃族」に熱中するのか「分からない、理解できない存在」であったのだろうか。

4-2 「魔鳥」と『台湾蕃族誌』

『台湾蕃族誌 第一巻』大正6年（1917年）には、「迷信」という項目がある¹⁵。その「五 識占的のもの」という項目の中に「魔鳥ハウネ」に関する記述がある。

蕃人の伝説にハウネと称する魔鳥あり、其形状鳩の如く白羽赤趾にして魔力の性を備え、之を使嗾する蕃人ありと称し、之をマハウネと云ひ、蕃人は此鳥を目撃すれば必ず死すべしと伝え、且この魔鳥

を使嗾するとの嫌疑を受くれば一族暗殺さるることもあり、又、此魔鳥を使ふ者ありと風説せられしもの番社は他社の交通するを避くと云ふ。

ハウネなる魔鳥は、マハウネなるしろうしゃ使嗾者の命ずる儘に他人に憑りて累をなすと信ぜられ且之を實現すれば立ち処に死すと言ひ、蕃人は之を恐怖すること甚だしく、この魔鳥を以て人を呪ふとの風評を立てられし者は殺害するも加害者に制裁を加うるを得ず…

『台湾蕃族誌 第一巻』 P288～

この記述に加え、当時（1912年～1913年）魔鳥使いの嫌疑を受けた例も挙げられており、完全に一致するものではないが、佐藤が『台湾蕃族誌』を参考にして「魔鳥」を書いたことは明らかである¹⁶。

4-3 『台湾蕃族誌』の視線—植民地と人類学

森は、台湾原住民に強い関心と同情を寄せ暴力による制圧には反対していた。彼は大正6年の『台湾蕃族誌 第一巻』の最後に「エルウエス氏の生蕃観」という講演記録を抜粋掲載している。最後に「氏の生蕃観なり余が過去20年に邇き台湾蕃地の放浪生活も亦無意義にあらざるを自ら慰む」と追記する。

（日本人の青年たちが蕃人を理解するために研究をすることをすすめ）学識あり常識ある人にして蕃語に熟したる人ありて初めて蕃人を知ることができます。斯の如き人ありて初て文明人と野蛮人の間に意志の疎通ができ、銃剣に訴えねば解決のできないことも或いは無事に済まし得ることができないこともなかろうかと思ふのであります。

森は、『台湾蕃族誌』の出版が台湾総督府（臨時台湾旧慣調査会）から行なわれたこと

もあり、はっきりといたいことを述べることができなかつたようであるが、イギリス人学者の言葉を借りて、自説を述べていると考えられる。

(イギリス植民地における蕃族の帰順の例、最も反抗したものがもっとも忠良な臣民となることを説明し) 今台湾に生息して居る生蕃で最も頑固に政府に反対している蕃人も他日は最も忠良なる日本臣民となって最も勇気あり信用すべき所の者となり、本島の為に非常に役立つ所の人間になるであらうと思ふて居るのであります。

最も反抗していたものが「他日は最も忠良なる日本臣民となって最も勇気あり信用すべき所の者とな」る。エルウエスのこの言葉は、後に「高砂義勇隊」¹⁸⁾として戦う台湾原住民の若者によって皮肉にも証明されることとなる。

森は台湾原住民の平和的な帰順を目指し、挫折し、死んでいった。彼の成した研究は人類学の貴重な資料として現在再評価されつつある。当時の文脈において考えると確かに彼の功績は大きい。その相対主義的な視点は画期ともいえるだろう。しかし、森が予測できたかどうかは別にして「高砂義勇隊」が彼の研究の果て、行き着く地点にあったとは否定できない。それは、台湾原住民にとっては「ジェノサイド」の別の形をとったものにすぎなかつた。

「あなた自身を忘れろ、私のことは忘れるな」から「あなた自身を知れ、私の真似をするな」まで見方は結局、同じである。「私たちのようになれ」なのだ。

『女性・ネイティブ・他者』(前出)

P83

森は原住民の存在を評価し、問題を暴力ではなく平和的に解決したいと願った。そして

彼の原住民調査を植民地経営に活かしたいと考えていた。森の理想は、アメリカに習い原住民のための保護区を作ることだったという。徒に同化を強制するのではなく分離保護を目指したのだ。しかし、それは原住民の願ったことだろうか。植民者と被植民者という関係においては、いかなる人道的な配慮も解消される。「私たちになるな」「私たちのようになれ」という植民者の声は、反抗が収まったあとの原住民の身体に浸透していく。その行く末には「高砂義勇隊」があつたのである。

人類学の植民地に果たした役割を考えると、森のたどつた研究の隘路が見えてくるのではないだろうか。

5. 「魔鳥」という記号——「魔鳥使い」はいかにして作られるか

5-1 「レケリミエント requerimiento (領有宣言)」——周辺化の「歴史」の始まり

(服従を怠つた場合に) 起こるのであろう死と喪失はそなたたちの過失であつて、カトリック両陛下の過失でも、我々の過失でもない。また、それは、我々と共にやってきたこれらの騎士たちの過失でもない。そして我々としては、このことをこのレケリミエントによってそなたたちに通告したので、この場で公証人の立会いを求め、そのものの証言を文書によって我々に伝えることを要求する。…

S・グリーンブラット

『驚異と占有—新世界の驚き』

本橋哲也は16世紀のスペイン人たちが新たな土地で住民に出会うたび、このような「レケリミエント(催告)」を読み上げたことをひいて、植民地的「歴史」の開始について言及している。もちろん言葉はまったく通じな

い状態で、スペイン人たちは、先住民の拒否や無視にあえば即座に武力で押さえつけた。このような一方的な、植民地支配を当然視した「レケリミエント」が繰り返し世界各地で行なわれた。「魔鳥」においても日本軍が「レケリミエント」を行い、武力で原住民を制圧した様子が描かれている。これは「理蕃5カ年計画」の際の原住民虐殺を指す。

蕃人たちの知らないうちにいつの間にか彼等自身の領土の中へ入り込んでいた或る文明国の軍隊の長い隊伍が蛮人たちの土地を貫いて強行軍した。…その無数の人間たちは蕃人に対して、いかに平地の人間でもこんな非道なことがよくもできるものかと考えられるような行為を敢てしたのである。彼等は手向かいも何もしない蕃人に向って、理屈もなく降伏せよと言って命令した。 「魔鳥 (八)」

そして、原住民をだまして一箇所に集め、火をつけ皆殺しにしてしまうのである。「この蕃社の蕃人どもは平生最も狂暴な奴等だった」——このような分けのわからない災難は、魔鳥使いの仕業にちがいない、説明不可能な事態に「蕃人」たちはそのように結論を下す。日本軍によって周辺化される原住民、そして原住民によって周辺化されるピラ。

不可解といえば、何故日本人が我々に対して命令する資格があるのか不可解である。我々と彼等は親でもなければ主従の関係でもない。我々は日本人の仇敵である理由は少しもない。漢人とは長い仇敵関係にあったが日本とは何もない。日本人は我々を保護するというが、実際には我々の耕す面積は年々減りつつあり、今では夫婦二人で三人分以上の食料を得ることは不可能である。我々の土地は我々のものにあらずや。

明治39年（1906年）『台湾旧慣記事』

さらに植民地解放後、台湾においては国民党による「レケリミエント」と再周辺化の歴史が始まるのである。

（ファノン^{20）}はこう述べている）脱植民地の反帝国主義の過程でもしナショナリズムの動力を、解放の内実をもつ社会政治意識へと転換できなければ…（民族ブルジョワジーが権力を握り、宗主国と結びつき）植民地を新植民地に変えてしまい、対内的には「内部植民」をすすめて、労働者階級・農民・原住民・女性・同性愛者を抑圧し、もともとのエスニック・グループ間の文化的差異の激発・衝突を安価でもたらす。（抜粋）

陳光興

「帝国の眼差し—『準』帝国とネイション・ステイトの文化的想像」

陳光興は戦後の台湾を準帝国と位置づけ、その国際資本主義体制に自らを組み込むための国民国家形成の問題点を述べ、「第三世界」の国家形成も決して美化できないと指摘している。

「呉鳳伝説」によって周辺化され続けた台湾原住民そのものが、戦後の台湾の「魔鳥」であったのではないだろうか。

5-2 「魔鳥」という記号

—ポストコロニアル、際限なき再周辺化

ピラは村人にとって「分からない存在」であったため、魔鳥使いにされてしまう。実際は山地に侵入した日本兵によって犯され、村にとって「不浄な」存在となってしまったのだ。他の民族と交わったピラは刺墨をすることはできない。たとえ刺墨をしても村の誰とも結婚はできないし、刺墨をするときにはこれまであったことを全て告白しなければならないと決まっていたからだった。ピラは本当のことが言えなかった。掟のために村からは

じき出されるピラとコーレは、日本統治下で抑圧される「蕃人」の中のさらに疎外された、つまり周辺化された存在となる。

植民地下であるいは戦争時で強姦されたり「慰安婦」として虐待を受けた女性たちの苦しみは、その被害の事実と向き合うことに加え、「被害者」である自分を受け入れることのない社会と向き合うことの両方であった。現在でも性的な被害にあった女性に対して、あたかもその女性に過失があったかのような言説が存在する。被害女性たちは、男性中心の貞操観念によって—男性の視線だけではなく、そのような観念に縛られた女性自身の自縛もあるのだが—何度も傷つけられていくのだ。

起こってしまったこととどう向き合うか。ファノン『地に呪われたる者』の中で、あるアルジェリア人の精神病の症例—妻が自分を庇いフランス軍兵士に強姦されてしまったために性的不能に陥る—を挙げ、そこから立ち直ることとなったきっかけについて言及している。

戦争が終わったらまた女房といっしょになろう、そう思ったのは、あの時からだ。というのも実をいえば農民たちが自分の目の前で強姦された妻の涙をぬぐってやるのを見たからなんだ。

『地に呪われたる者』 P251

戦争や植民地支配による耐えがたい暴力や苦痛にいかに対処すべきか、その感情の記憶は復讐心となることもある。私たちは魔鳥使いではない—ピラは弟コーレに「私たちにはただ不幸がふりかかっているのだ。その不幸を与えたのは誰だか知らない。でも、私たちは不幸を与えた人に復讐しなければならない」と言い、新月の方向—故郷の村のある西—へ弓を射るように命じる。ピラの復讐の相手は、彼女を強姦した日本軍ではなく、彼女と家族

を「魔鳥使い」にした故郷の村であったのだ。「魔鳥使い」であることを否定したピラは、しかしどこまでも無力である。コーレも他の部族の「首狩」によって死んでしまう。

「要するに、仲間のものが魔鳥使いに仕上げてしまうのだ。皆でそう認めてしまうのだ。それ以外に何の証拠もあるわけではない—

作中では文明国にも蕃人の中にもあるとされた迷信「魔鳥」は、「内部植民」と周辺化を示す記号と読むことができる。

【佐藤春夫台湾関連作品】

大正9年《1920》28歳

6月～10月 台湾・福建旅行

大正10年《1921》29歳

1月「黄五娘」『改造3・1』

3月「星」『改造3・3』（「黄五娘」を改稿したもの）

8月「南方紀行」『新潮35・2, 3, 5』（11月まで連載）

「廈門の印象」「章美雪女士之墓」

「集美学校」「鷺江の月明」

「漳州」「朱雨亭の事、その他」

「日月潭に遊ぶの記」

9月「蝗の大旅行」『童話2・9』

大正11年《1922》30歳

4月『南方紀行』新潮社

大正12年《1923》31歳

8月「鷹爪花」『中央公論38・9』

9月 関東大震災

10月「魔鳥」『中央公論38・11』

大正13年《1924》32歳

6月「旅びと」『新潮40・6』

10月『旅びと』新潮社

大正14年《1925》33歳

3月「霧社」『改造7・3』

5月「女誠扇綺譚」『女性7・5』

大正15年・昭和元年《1926》

2月『女誠扇綺譚』第一書房

9月『蝗の大旅行』改造社

「天上聖母のこと」『三田文学1・6』

昭和2年《1927》35歳

7月 中国（上海、南京）旅行

- 昭和3年《1928》36歳
1月「日章旗の下に」『女性13・1』
- 昭和7年《1932》40歳
9月「殖民地の旅」『中央公論47・10,11』
- 昭和11年《1936》44歳
7月『霧社』昭森社
- 昭和12年《1937》45歳
8月「社寮島旅情記」『文学 5・8』
12月「廈門のはなし」『改造 19・15』
- 昭和18年《1943》51歳
11月『霧社』昭森社 再刊行
(内容一部変更「殖民地の旅」を省いて「社寮島旅情記」に変えた)

* 蜂矢宣朗 (1991) 『南方憧憬—佐藤春夫と中村地平』を参考に纏めた。

(注)

- 1) 2004年調査で人口約45万人、台湾の総人口2100万人の内の2%を占める。「熟蕃」は清朝に帰順した主に平地に住む人々、「生蕃」はそれ以外の山地に住む人々とされ、日本もこの分類を使用した。12族が認定されているが厳密には、台湾の非漢族系住民と考えるべきであろう。1994年憲法の中で正式に原住民という呼称が使用された。大正11年調査によると台湾の総人口は390万人(内地人17万人・本島人361万人・生蕃8万人・外国人3万人)であるが、熟蕃と呼ばれた人々の人数が不明なため正確には比較できない。『植民地年鑑27 台湾年鑑1』大正13年版(日本図書センター2001年復刻版)より
- 2) 1914年『公学校用国民読本』、1920年『東洋歴史大辞典』に掲載されている。いずれも中田直久『通事呉鳳』(1912)をもとに書かれている。駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店1996年 P166~185に詳しい。
- 3) 『日本教科書大系 近代編 国語 第7巻』講談社1963~1964年 P402
- 4) 「阿里山の侠児」は田坂具隆監督岩崎昶原作の作品である。現在では見ることはできない。原作はクライスト「聖ドミンゴ島の婚約」などを下敷きにして書かれた。岩崎昶『映画が若かったとき』(平凡社1980年)P339~
- 5) 「理蕃5カ年計画」で日本側は2200人以上の死者を出した。原住民の被害は明らかな記録はないが、これをはるかに上回る数であったと推測できる。曾山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』(青丘社2003年)P45~
- 6) 森はいくつかのペンネームを使い分けていた。森丙牛・はに牛・熄火山人・曾遊生・剣潭子など本稿では森丑之助という本名で呼ぶ。
- 7) 『定本 佐藤春夫全集 第18巻』臨川書店2001年 P231
- 8) 『定本 佐藤春夫全集 第18巻』臨川書店2001年 P108
- 9) 佐藤は「魔鳥」の中で「蝨」という字と「蕃」という字を使用している。一~六までは「蝨」、七以降は「蕃」を用いている。一般論と台湾の話で使い分けしているとも考えられるが、一~六までの間にも「魔鳥」ハフネの説明があるのでそうとも言い切れない。現在のところ推測にすぎないが、震災直後に書いたとされる「魔鳥」の制作時期について前半と後半でずれがあることも考えられる。後半はすでに書かれていて、震災後に「前半」を部分的に追加したとすると内容的・時間的に説明しやすくなる。今後「魔鳥」の執筆時期に関する調査を進めて行きたい。
- 10) 佐藤は後に大逆事件の「紀州組」に関係する作品を幾つか残している。『わんぱく時代』(1957)など。
- 11) 『定本 佐藤春夫全集 第19巻』臨川書店2001年 P181~182
『中央公論』1923年11月号 P101
- 12) 『日本植民地文学精選集 台湾編』P149
- 13) 『定本 佐藤春夫全集 第36巻』臨川書店2001年 P85
- 14) 森の生涯については楊南部『幻の人類学者 森丑之助』(風響社2005年)に詳しい。
- 15) 「第5編 信仰及び心的状態」第一章 祭祀 第二章 伝説 第三章 巫観 第四章 迷信 第五章 首狩 第六章 音楽 という構成になっている。
- 16) 前出『幻の人類学者 森丑之助』「森丑之助と佐藤春夫」(笠原政治)の中でも指摘されている。
- 17) イギリス人人類学者エルウエスは明治45年に台湾の山地を視察している。その際の講演記録である。
- 18) 台湾の特別志願兵制度は朝鮮に遅れること4年、1942年に施行された。中国戦線に漢族系台

湾人を送ることへの躊躇があったという。43年に志願兵制度，45年に徴兵制が実施された。「高砂義勇隊」として1943年に「高砂族特別義勇兵」500人が南方へ送られた。44年には800余名が集められた。全部で7回，4200人が派遣された。林えいだい『証言高砂義勇隊』（草風館1998年）P8～

19) 鈴木明『高砂族に捧げる』（中央公論社1976年）P115～

20) フランツ・ファノン（1925年～1961年），フランス領マルチニク島生まれ，精神科医。1954年アルジェリア解放戦争に医師として遭遇したことから，FNS（民族解放戦線）のメンバーとして活動するが，白血病によって急死。『黒い皮膚・白い仮面』（1952），『地に呪われたる者』（1960）などを残す。

* 本論中の「魔鳥」は『中央公論』1923年10月号，『定本 佐藤春夫全集』（臨川書店），黒川創『南方・南洋/台湾』（新宿書房）などを参照した。